

A photograph of a black and white bird, possibly a wagtail, standing on a lush green mossy ground. The bird is positioned on the right side of the frame, facing left. The background features a large tree trunk and its roots, partially covered in moss, and a dark structure, possibly a building or fence, in the upper left. The overall scene is a quiet, natural setting.

鳥の夢

帆向 七瀬

イタリアに行かなければならない。

なにしろこちらが言い出したことだから、彼女を待たせるわけにはいかない。待ち合わせは25時10分、あと30分しかない。

それなのになにひとつ用意ができていない。部屋中に散乱したもののなかに、必要なものはひとつも見当たらない。着替えもない、財布もない、そもそもパスポートはとってあったらどうか。

目の奥がじり、と痛む。じり、じり。じり、ざら、ざら。流れていく。

ともかく動かなければならない。動いて、なにかをしなれば。立ちすくんだままの足を、どうにか前に進めようとする。けれども根がはえたように動かない。意志とは切り離されたからだをもて余して、途方に暮れている。

なにも動かない部屋のなかで、時計の針ばかりが進んでいく。それを黙って見送るほかはない。

あと20分……15分……10分……

突然からだが軽くなった。まばたきひとつ分も迷うことなく、クロゼットに向かってまっしぐらに進む。扉を開いて、奥の奥に手をつっこむ。指先にふれたものを、ありったけの力で引き抜くと、ずっと昔に彼女が隠したカラスウリだった。

そうだ、これを探していたのだ。

抱きしめると、カラスウリは、すうっとからだの奥に溶けていった。

そんな夢をみた。

「あの星、あなたにあげてもいいわ」

小さな爪の光る指先で、あなたは夜空をさしてみせた。平らな爪は、伸ばしたほうが不格好になってしまうものだから、いつも短く切られている。その爪が遠く、目の下に広がる街のかすかな光を反射して、ちらちらと揺れている。けれども指さす先にはなにもない。ただ重たい夜空が広がっている。

「どれを」

と尋ねると、あなたはこちらに身を寄せて、すこし大げさな手つきで指を動かした。ほっそりした指の先に、先ほどまでは確かになにもなかったはずのその場所に、小さな小さな点が生まれていた。

「あれを」

と私が頷くと、あなたは嬉しそうに手を降ろして、ゆらゆらと足を動かした。腰かけた木の枝が、その動きに合わせて揺れている。私もあなたの調子に合わせて、足を振る。あなたも私も、不思議と、落ちてしまうことはすこしも考えていなかった。

「あれを」

もう一度手をあげて、ゆっくりと伸ばした白い指先で、あなたは星にふれる。

「あの星を、あなたに」

あなたはそう囁いて、音をたてないようにほほ笑んだ。その瞬間、あなたの伸ばした指先がほろほろとくずれて、白い白いかけらになった。指先から手首、肘、肩の丸いところ。次々と、あなたはかけらになって落ちてゆく。最後のひとかけが、ふうっと風に乗って、遠く、街のほうへと飛んでいった。

ああこうして雪は降るのだな、と目覚めた朝は、一面の雪景色だった。

「卵はきれいだよ」

いやにまじめくさった顔つきで、彼が言った。

また始まったのだ。私は居住まいを正して、彼に向き直る。もったいをつけてひとつ頷いてから、彼はもう一度言った。

「卵はきれいだよ。あんなに怖いもの、好きだっていうほうが、どうかしてるんだ」

そう、と私はほほ笑む。相づちはそれだけ。なぜ、と尋ねてもいけない。それがルールだった。

「波打ちぎわだって、きれいだ。あんな乱暴なもの」

掃除機もきれい、ニンジンもきれい、足の小指のツメもきれい……

次から次へとあふれる彼の言葉に、結局のところ、意味なんかないのだ。これは彼の、いつもの言葉遊びだった。ウソでもない、ホントウでもない言葉ばかりがひしめいている。だからその中にひとつ、たったひとつ、ホントウの——もしかするとウソの——言葉がまぎれていたって、私にはちっともわからないのだった。

クモもきれい、虫じゃないよ、あの空にぷかぷかしてるやつだ、だってあんなにひどいやつってないよ、それから——

「きみがきれい」

彼のピカピカ光る、こんぺいとうみたいな目が、じっと私を見つめている。それはいつか、私が彼にお土産で買ってやった、そして冬の寒い夜にベランダで並んで食べた、ゆず味のこんぺいとうに、とてもよく似ていた。

私がそう、と頷いてほほ笑むと、彼はつるりとまばたきをして、ふたたびきれいなものを並べていった。

おとぎ話もきれい、真っ白い紙もきれい、それから干したての布団もきれい、それから、それから……

私はそう、とほほ笑む。それ以上のことはなにも、言ってはいけない。

それがルールだった。

さて、それではあなた、あなたのお話をしましょう。

そう言って含むように笑う男、私はその男を知っていた。薄い灰色の立ち姿、長い中指のうつくしさまで、よく記憶している。それなのに、顔だけはどうしても思い出せないでいた。

あなた、ご存知ないでしょう。

あなたのその目、それは星の目ですよ。

空の境目ではじけた星、そのひとかけがいつか、あなたの口に飛び込みました。

それであなた、そんなにうつくしい目をしているのです。

顔のない男は、やわらかな、耳あたりの良い口調で喋っている。手を伸ばしてもわずかに届かない、そんな距離でじっと腕組みをして、立っている。なにしろ顔がないものだから、まなざしが分からない。そのおかげで私はどうにも、彼への対応を決めかねていた。

それからその手、覚えていますか。

あなたそれで、貝がらを拾ったでしょう。

私は思わず、両の手を空にかざした。水かきのない指のすき間から、光がちらちらともれている。けれども私は、今が夜であることを知っていた。

浜辺を点々と歩きながら、ひとつ、またひとつと、さくら色のやら、巻いたのやら、片方しかないのやら。あれはとても、うつくしかった。

豊かな吐息を滲ませて、男は言った。私は両方の指を、そっと握り込む。そう、この手、この手だったかもしれない。

ですからどうか、あなたが眠りにつく夜、わたしを呼んでください。

赤い帽子に拾い集めた貝がらを、枕辺に持ってゆきますから。

きっと、と私は尋ねた。きっと、来てくれるの。すると男の顔が、水底から浮き上がるようにして、じんわりと現れてきた。輪郭の薄いくちびる、肌になじむ鼻筋、それから、細い一重まぶたの瞳。口もとにひどく懐かしい笑みを浮かべて、男は言った。

そう、きっとです。

ああもう夜明けは過ぎていたのだと、私は静かにまぶたを降ろした。

眠たい、というのに、^め睛を見開いている。墨で塗りつぶしたような暗闇の中、なにも見えないはずなのに、なにかを睨むような強さで見開いている。光などどこにもないはずなのに、その睛がゆらゆらと輝いているのは、なぜだろう。

「睛」

かけた声に、反応する気配はない。

「閉じたら、睛」

もう一度言う。二、三秒してようやく、つめていた息を吐くような、長いため息が聞こえた。布のこすれる音がして、それからその指がこちらの布団をまさぐった。はじめに指先が触れて、次に爪がかちりと当たって、そろそろと骨をなぞって、そしてようやく手を握った。

「閉じい」

息だけの、声で言った。うん、と息だけの声が応えた。ないしょ話のようだと思う。しばらく呼吸だけが聞こえた。

揺れる光は、やっと、暗闇に溶けていった。

あなたは言った。

寂しくはないか。

はなから馬鹿げていた。それに応えて、一体何になるだろう。私はあなたを一瞥した。あなたは別段、応えを待っているふうではなかったから、私は何も聞かなかったことにした。それで差し障りはないと思っていた。

私は実を言うと、あなたが大嫌いだった。けれどそんなことを、私は言わないでいようと思った。あなたは弱いから。すぐにでも、泣いてしまうのだから。

けれどもしばらくすると、あなたはまた、寂しくはないかと言った。私が応えないでいると、あなたは応えを聞くまで是が非でも待つと言った。私は呆れた。本心では、私の応えなど少しも気にしていないだろうに、あなたは執拗に食いさがるのだ。それは、ただの意地としか思えなかった。こんなことに付き合わされる私自身を、憐れみさえもした。

寂しいわけが、あるだろうか。

私はできるだけ穏やかにそう述べた。そうしてまた、あなたを一瞥した。あなたの黒々した瞳は、何か他のことを考えているようで、輪郭をはっきりとしなかった。

そもそもあなたは、私に興味などないのだ。私にはそれが分かった。しばらく私は、観察するようにじっと、あなたを眺めた。気持ちのいいものであるはずがないのに、あなたは一向気にしないようだった。それがまったく私の非重要性を語っているようで、私はついに我慢を忘れた。

寂しくはないから向こうへ行ってくれないか。

真黒な瞳をこちらに向けて、どうしてとあなたは囁いた。それがあまりにも応えを分かっているようで、私は腹が立った。今さらあなたに説明するのは、自分がまるで馬鹿者のように思えた。

そこで私は、ただひと言を吐き出した。

あなたが大嫌いだ。

それでことは足りていた。私はあなたの黒々した瞳を見つめた。その内に、あなたの瞳はぼんやりと霞みはじめた。あなたは泣くのだろうと、私には分かった。

嫌いか。

あなたは、はっきりと私に言いはしなかった。けれども私は、私を脅かすものすべてを追いつめなければならなかった。

大嫌いだと、言ったろう。

私の声の直後、あなたの瞳は、一層ぼんやりとした。水でできているように、ゆらゆらと揺れた。これはそろそろ泣くなと私は思った。

あなたは、私が嫌いか。

あなたはまた、囁いた。今度も誰に言ったのか分からない口ぶりだった。私はよっぽどあなたを責めたかったが、あなたが泣くと私はどうにもならないので、黙ったままでいた。するとあなたは何かを呟いた。私は喋らなかったのに、何の物音もなかったのに、あなたの声は阻まれた。私は聞き返さなかった。それなのにあなたは、今度こそはっきりと私に述べた。

私はあなたが、大好きだ。

あなたの瞳が、ついに大きくぼやけた。けれどあなたの顔も同様にぼやけた。それだけではなかった。あなたの周りの景色も、私の周りの景色も、すべてがぼやけていた。

そうして、私が瞬きをすると、そのすべてがぼろぼろと溶けて崩れ落ちた。

弱いのは、私の方だった。

私はそこにいた。そこは蒼ばかりで、じっと眺めていると、しまいにはそこがどこだか分からなくなるようだった。私はそこで待っていた。百年でも千年でも、待つつもりでいた。けれどもしばらく経って、私はあなたが隣にいることを知った。あなたはぼんやりと、しかし確かに、そこを眺めていた。

何をしているのかと、私はあなたに尋ねた。あなたはふと思い出したかのように、私を見つめた。あなたの瞳には、私の姿がはっきりと映っていた。あんまりはっきりしていて、だから私は、あなたが私を見ていないのではないかと思った。しかしあなたはゆっくりとまばたくと、ただ待っているのだと応えた。

誰を、と尋ねた。しばらくすると、あなたはやはり待っているのだと応えた。

そこで私は、ここで待っているのかと尋ねた。しかしあなたは、やはりしばらくしてから、ただ待っているのだと言った。

私は急に腹が立った。よく知りもしないあなたのことを、通り一遍の応えしか持たない馬鹿者だと蔑んだ。けれどもそうするうちに、私は不意に自分のことに気が付いた。

誰を待っているのか。どうして待っているのか。ここで良いのか。

私はそのどれにも、応えを持たなかった。

私は確かに待っていた。つい先刻来たような気もするし、もう随分になる気もした。それなのに、私は理由も分からないまま、そこで待っていたのだ。

どこまでも広がるその蒼は、空のようでもあったし、深い闇のようでもあった。私はそこを動くことができなかった。何の束縛もないそこで、身じろぎもせずに、待っていたのだ。私はあなたを蔑んだ自分を、馬鹿だと思った。私はどれほどの者だっただろう。

私は急に言葉をなくした。蒼の底に、引きずられてしまう気がしていた。

するといきなり、あなたは私を見つめた。真っ黒い、底の知れない瞳は、どこか困惑したようでもあった。

ここはどこだか分かるか。

あなたは尋ねた。私はあなたが、私を責めるのだと思った。私は消えそうな心持ちで応えた。

いいや、知らない。

あなたは私をじっと見つめた。私は乾いた喉を無理に動かして、唾を飲み込んだ。

そうか。私にも分からない。

ひとり言のようなあなたの声は、少しも私を、あなたを蔑んだ私を、責めてはいなかった。

分からないが、懐かしい。ここはまるで、かなしみのようだ。

あなたはやはり、誰にも言わない口調で呟いた。確かにその通りだった。ときどき空よりも透きとおって、ときどき闇よりも深い蒼を、私はよく知っていたのだ。

あなたは誰だ。

私は尋ねた。するとあなたは、ようやく安心したように応えた。

誰って、私は私だ。

ほう、と深い息が、私の口唇からもれた。本当は、私だって知っていたのだ。あなたの長いま

ばたきを待って、私は告白した。

私はあなたを待っていた。私はここで、もうずいぶん会いたくて、あなたを待っていた。あなたは驚かなかった。ただ少し笑って、今度こそは私に言った。

私もあなたを待っていた。

私が覚えているのは、それだけである。

彼女は誰よりも、飛行機を見つけるのがうまかった。誰も気付かないうちから飛行機の音を聞きつけて、じっと空を見上げていた。そして誰かが彼女の視線を追うと、そこには必ず、白い機体が青を切り裂いていた。

彼女はカツンと鳴るヒールが好きだと言った。タップダンスを踊れそうな気になると、あまりにまじめな顔で言うものだから、僕は思わず笑ってしまった。

彼女は眠る時、月を眺めていた。理由はない、ただそういう習慣なのだそうだ。あえて理由を挙げるのなら、月の道しるべをしているのかもしれない、と半分眠りながら呟いていた。

眠ることが嫌いな人だった。もったいない、とよくこぼしていた。眠るのをあと一時間減らせば、本を一日一冊と半分、読めるのだそうだ。それでも彼女は、布団に入ると、入らなくても横になるだけで、すぐに眠ってしまう人だった。眠気に耐性がないのかもしれないと、やけにしょげていたので、僕は彼女と一緒に眠ってあげることを約束した。

カナリアの子守歌を、唄っていた。眠らないように唄うのだと言っていた。その真偽はまだ、僕の知るところではない。

ゲームは苦手だけれど、オセロだけは得意なのだと、白黒の駒を手に、いつだか自慢気に話していた。

コーヒーも紅茶も、ミルクをたっぷり入れたのが好きだと言っていた。舌の奥で、じっくりと味わえるのだそうだ。僕が子どもじみていると言うと、でも砂糖は少なくてかまわないのだと、的外れの反論をした。

ある日彼女は、信号が点滅しても走らない人になりたい、と語った。そんなふうに生きたいと言った。次があるでしょうと言えるようになれば、彼女の人生は彼女のものになるのだそうだ。僕はまだ、その意味をはかりかねている。

彼女に関するすべては、少しも色あせていない。

だから僕は今でも、覚めてしまった今でも、彼女がそこにいる気がしてならないのだ。

奴はたいそう黒い、濡れたような双眸を備えている。これがまず、質が悪い。奴は要求を言葉にはしない。ただじっと、何より雄弁なその黒曜をこちらに向けるのである。それががみがみと吠え立てるよりもよっぽど効用があると、奴は重々承知しているのである。私はいつもそれに手向かいするのだが、ついぞ勝ったためしが無い。奴は何とも平和的な手段で、自らの要求を通してしまふのである。私は呪わしい気持ち半分、見習おうという殊勝な心がけ半分で、奴の要求に応えている。

そして奴は、どうやって知るものか、自らに最適の場所をすぐさま見つけ出してくる。他人の迷惑なぞ構うものではない。それは私の敷き立ての布団であったり、陽当たりの良好なガラス戸のすぐ傍であったり、じつに様々である。殊に、晴れた春の日、手入れもしていない庭の芝の上に堂々と寝転がって、目を細めているさまなど、にゃあと鳴き出さないのが不思議なほどである。

その上、奴は熱い食いものがぜんたい駄目である。少しでも自らの許容範囲を越えていけば、ひと口舐めたあと、ふいとそっぽを向いてしまう。食いものばかりではない。一事が万事、そんな調子なのである。気に入らないものは頑なに拒み、まるで妥協というものを知らない。好きなときに寄ってきて体をすり寄せるくせに、気の向かないときなど、こちらから寄っていったところで見向きもしない。気まぐれをかたちにしたような奴は、まさに私に猫を思わせるのである。

かと思えば、奴は孤独を忌み嫌う。ひとりで泰然と眠っているくせに、私が家を出る気配を拾うとすぐさま飛び起きる。そうして例の黒曜に恨みがましい色を溢れんばかりにたたえ、じっとこちらを見るのである。そういうところは、じつに奴の本性にかなっていると言える。

こんな風に、相反する面を矛盾もなくその身に抱え込んでいるものだから、私は結局奴の虜なのである。今もそうだ。尾っぽを千切れんばかりに振り、わんとひと声鳴いて私の帰宅を心より喜ぶ奴に、私はついついだらしもなく相好を崩してしまうのである。

『週末にくる』

ゆがんで大きさもまちまちな文字。廊下のざらざらした壁に、くすんだ金色の押しピンで無造作に止めてある。ひとさし指でなぞるとぼこぼこしていた。週末にくる。週末に...週末に.....なにがくるのだろう。

「ラジオ」

じつとながめていたら、あの人はそう教えてくれた。そういえば、おとといスーパーで、あれこれ悩んでさんざん迷って、やっと決めたのだった。

メインの機能はラジオではない。CDが聞けて（リピートボタン付きなのが決め手だった）、アラームも鳴る、そのおまけにラジオがついた、小さな小さな、...ラジオだった。

ラジオなんてたまにしか聞かない。あの人もそうだ。けれどもふたりして、ラジオはAMにかぎる、なんて偉そうに言ったりもする。アンテナの具合ひとつでノイズが混じる、あの不安定さが好きだった。寝る前に、干したての布団のなかで聞く、砂を延々ながし続けているようなノイズの向こうから、とぎれとぎれにかすれた声が届くのが、好きだった。

先月のまま、めくり忘れたカレンダーをめくって、週末のあたりを（そもそも週末って何曜日と何曜日だろう。金曜も週末？）赤いフェルトペンでぐるぐる囲った。ペン先がほとんどかわいているから、念を入れて何重にも。そろそろ買わなければ。あ、

「ねえ」

あの人がふり向いた。めずらしい。いつもはテレビばかり、食い入るように見ているのだ。

「週末、赤ペンも買おう」

ひとさし指と親指でつまんで、1ダース三百円だったペンをふると、あの人は笑った。近くにあった紙をちぎって（それ、ゼミで使う論文じゃなかった？）、黒いボールペンでなにかを書き付けて、笑ったままそれを寄越した。

三つことばを並べただけのメモ。ゆがんで、ふぞろいな字。さわるとやっぱりぼこぼこしている。仕方がないから、くすんだ金色の押しピンで、ざらざらした壁に止めてやった。

『週末にくる』

『xxと ペンを 買う』